



231号

2018 / 3 / 1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’

〒195-0055 町田市三輪緑山2-18-19 寺西方

☎044-986-4195

<http://wanli-san.com/>

Eメール:t_taizan@yahoo.co.jp



晴れ着姿が嬉しい日 現地在住の写真家・大川健三氏の計らいで丹巴県のチベット系仏教寺院で開催の春節・元宵節に参加した。老若男女それぞれがとっておきの衣装に身を包み楽しそうに境内で繰り広げられる民族舞踊に興じていた。そんな中でもひとときわ賑やかなグループの人たちがいて、思わず写真を撮らせてもらった。(四川省丹巴県 2017年2月)

撮影：為我井 輝忠

「瞞天过海(天を欺き海を渡る)」は、日本では余り馴染みがありませんけれど、中国では幼稚園児に、このような言葉も教えると言うことに、面白みを感じました。



唐の太宗(即位する前の李世民)は、かつて30万の大軍を率いて、高句麗を攻めたことがありました。(高句麗征伐は海上から計画されました。)

しかし、海を見たことがなかった李世民は、水を怖がって、海上からの遠征にしり込みしました。そこで、配下の将軍薛仁貴は、太宗の為に一計を案じました。

その日、薛將軍は部下を李世民の所へ遣わし、「或る豊かな商人が30万の軍隊の為に宴会を開いてくれ、李世民にも宴会に出席するよう希望している」と伝えさせました。李世民は宴会に出席することに同意して、その兵士と連れ立って、その商人の家に向かいました。壁も床も豪華な絨毯で覆われた廊下を通って、部屋に入ると、沢山の酒とご馳走が並んでいて、賑やかな宴会が始まりました。李世民は、楽しく酒を酌み交わし、ご馳走に舌鼓を打っている間に、ふとヒューヒューと鳴る風の音に気が付き、訝しく思って窓の外を覗いてみると、驚いたことに、辺りは波が逆巻く大海原でした。彼は、既に彼の30万の軍隊と一緒に海に乗り出し、高句麗へと向かっているのです。



言葉の説明では：「瞞」とは、真実を隠して人に知らせないこと。だましのテクニックを使って、密かに活動すること、と出ています。

使用例としては、「間違いを犯したとき、それを認めるのが嫌で、だましのテクニックを用いて、自分の過ちを覆い隠そうとする人がいる。」となっています。

この言葉、日本で日常的には使いませんが、辞書には、「天を欺いて、海を渡る」「人目をくらまして悪事を行う」と出ています。言葉として知っていれば、何かと便利に

使えるかも知れませんが、入学準備をしている子供たちに、態々教える言葉でもないように思います。お話としては面白いのですが、騙したことは悪いことだとの認識を与えずに話しているところが、中国らしいというか、日本人としては少々違和感を覚える処です。

日本の子供向けのお話だと、騙すことは悪いことで、他人をだますと、一時成功したようでも最後には必ず、騙したことへの報いがあると、因果応報の考え方が教えられています。例えば、猿蟹合戦のサルのように。

もう一つ、面白い点は、騙される主人公が、即位前とは言え、唐王朝の二代目皇帝太宗である点です。中国の皇

帝は絶大な権力を持ち、名前と同じ字は使えないとか、科学の答案では、皇帝の名前は、他の行頭より一字高く書くとか、日本人にしたら気が遠くなりそうな方法で敬われているのに、時代が代わったとは言え、皇帝が、1500年後に国民から笑いものにされているのが不思議です。

でも、これは中国独特の易姓

革命の観点から見ると何でもありません。中国の王朝は、天命を受けて政治を司るので、天命に背けば、異姓の一族が新たに王朝を建て、前王朝を倒すのは当然で、倒された一族は野に下ります。これが易姓革命です。

この件で、私は北京滞在中に面白い経験をしました。20年近く前、江沢民政権が内政の必要性からか、国民の反日感情を煽るために、毎日午後の定時に、抗日戦争の映像を流すので、中国人の友人に、「中国にアヘンを持ち込んだイギリスや、アロー戦争で北京に攻め込んで、円明園を破壊し尽くした英仏軍の方が、中国にとっては、日本よりずっと大きな損害を与えたのに、何故非難しないの?」と抗議したところ、友人は、「英仏が損害を与えたのは清王朝だが、日本は中華人民共和国と戦ったのだから」との返事が帰って来て、びっくりしました。現在の中国人にとって、滅亡した清朝は、もはや自分の国ではなかったのです。

Yǐ dé bào yuàn

以德報怨

とくを以てうらみむく
徳を以て怨に報ゆうえだあつお
桜美林大学名誉教授 / 孔子学院講師 植田渥雄

ある人が孔子に尋ねました。「或曰：以德報怨，何如？(Huò yuē：Yǐ dé bào yuàn, hé rú?)」(或ひと曰く、徳を以て怨に報ゆるは、何如ん)〈憲問第十四〉。徳でもって相手の怨みに報いてやるという考え方もあるが、先生はどう思われますか、と。この場合の「徳」とは、恩恵のことです。相手から怨みを受けたときに、それを怨みで返すのではなく、逆に恩恵を与えることで応えてやってはどうか、ということなのです。

これに対して孔子は、答える前に次のように問い返しました。「子曰：何以報徳？(Zǐ yuē：Hé yǐ bào dé?)」(子曰く、何を以てか徳に報いん)。怨みに対して徳でもって応えるということであれば、では徳に対しては何でもって応えたらいいのでしょうか、と。

そして次のように答えました。「以直報怨，以德報徳(Yǐ zhí bào yuàn, yǐ dé bào dé)」(直を以て怨に報い、徳を以て徳に報ゆ)。怨みに対しては直で応え、徳に対しては徳で応えます、と。孔子はここで「直」という言葉を使っています。直とは何か。実直、愚直、率直などの語が示すように、まっすぐな心という意味です。また、「理非曲直」という四字熟語が示すように、公正な判断という意味もあります。相手から受けた怨みに対しては、その中身を公正に判断し、自己の利害やその場の感情に左右されることなく、冷静かつ無私の心で対処することを勧めているのです。

怨みを受けるということは、必ずそれなりの理由があるはずです。その原因が相手方にある場合もあれば、自分の方にある場合もあります。冷静かつ無私の心で対処するということは、その点を明らかにするという点でもあります。

そしてまた、次のようにも言っています。「躬自厚而薄責于人，則远怨矣(Gōng zì hòu ér báo zé yú rén, zé yuǎn yuàn yǐ)」(躬自ら厚くして薄く人を責むれば、則ち怨に遠ざかる)〈衛霊公第十五〉。怨みを避けるためには、自分には厳正に、人には寛大にと心掛けるのがよい、と。自分に厳しく他人には寛大に。そんな甘い考えでは、今のこの時代は生きていけないという人もいるかもしれません。それも一理ありますが、それで生き抜ける人は他から怨まれても動じない、いわば「鈍感力」の持ち主に限られます。

それはともかくとして、話をもとに戻しましょう。「徳を以て怨に報ゆるは、何如ん」という、ある人の問いかけに、孔子は正面から答えることを避けています。何故でしょうか。

実は、これに似た言葉が『老子』という書物にも出てきます。この書物と、それを書いた老子という人物が、はたして孔子と同時代に実在したかどうかについては疑問視する向きもありますが、こういう考え方が当時あったことは明らかです。例えば支配者が民衆から怨みを受けた時、その怨みに力尽くで報復するのではなく、逆に恩恵を施すことで民衆の不満を解消した方が得策である、という考えです。これは政治手法の一つとして、あるいはあり得たかも知れません。これに対して孔子は、コトバの上からは共感しながらも、あるいはその裏に潜む欺瞞性を見抜いていたのかもしれません。

ちなみに「アメとムチで支配する」「札ビラで頬っぺたを叩く」という語が示すように、これは時として今でも通用する政治手法です。

(わんりい「中国語で読む漢詩の会」講師)

5年9か月ぶりの四川の旅である。2017年10月19日・17時30分、ANAの成田発NH947便は機首を上げ雲の中に入って行った。

友人が「四川省にどうしても行ってみたい」と言うので私も四川省なら、ということで同行することにした。四川省には2012年1月に初めて行き今回が2度目であるが、天候については地形の関係上と事前に聞いていた通り、毎日ぐずついて時折小雨が降った。この旅の一週間も毎日曇りか霧雨にたたられた。晴れ男と周囲に自慢していたが、四川省に関する限り返上しなければならない。しかし全体としては四川省は好きであるし良い印象しかない。九寨溝、四姑娘山、峨眉山など他省に無い自然の美しさ・豊かさ、成都市の整然とした街並——特に私の好きな日本の銀座に相当すると思う春熙路周辺また都江堰、武侯祠、杜甫草堂そして李清照など歴史上の史跡・人物も多く、「天府の国」の名にふさわしい地であった。ただ火鍋には閉口したが・・・。

成都市内の地下鉄は2010年に1号線が初めて開通したばかりであったが、現在は4～5路線が運行していて驚いた。前回は都江堰と市中心部の名所に行ったので、今回はそれ以外の場所を友人に提案しておいた。特に行きたかったのは、1996年に世界遺産に登録され、中国四大仏教名

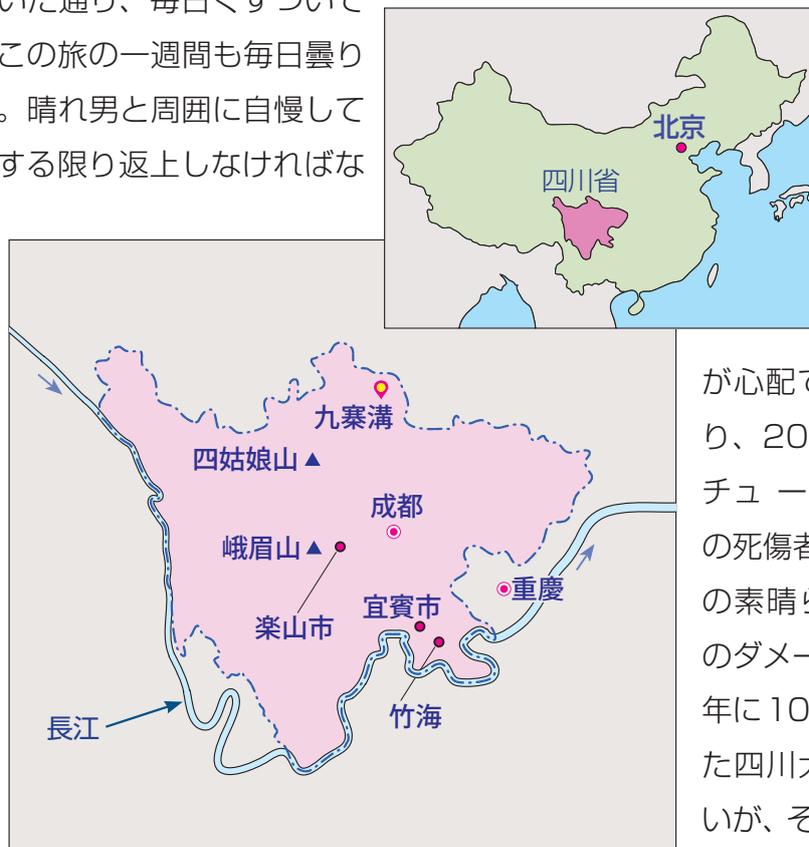
山の一つである峨眉山である。合わせて樂山大仏も見たかった。そのほかにメジャーではないが、「酒都」の別称を持つ宜賓市にある李庄古鎮や竹海もお勧めの観光地である。今回の旅には、故郷が宜賓市で大連在住の友人も駆けつけ案内してくれた。中国人は友達をととても大事にしてくれる。

四川は天府の国ではあるが、自然災害が多いと

ころでもある。上記の観光地の中で、今回は行くことが出来ず、また当分の間行けないと思うが、九寨溝の地震の被害

が心配である。ご承知の通り、2017年8月のマグニチュード7の大地震で多くの死傷者を出し、湖や滝などの素晴らしい景観がかなりのダメージを受けた。2008年に10万人近い死者を出した四川大地震が記憶に新しいが、そこからあまり遠くない場所だけにその余震では

ないかと私には思えるのであるが・・・。都江堰地方もその昔河川の洪水に悩まされてきた。2千年あまり前に李冰親子が難工事であったが岷江という暴れ川を長江と成都方面に分ける工事をした結果、洪水に悩まされることが無くなったのである。人々は心から感謝し親子を王と称した。二王廟に祀られている。またいずれ書いていくが、樂山大仏はこの岷江の下流にあり、大仏は大渡河との合流地点に造られていて、やはり洪水と深いか



かわりがあったのだ。

話を戻して行きの機内について少し書いておきたい。2012年に行った時は、この直行便の開設があまり知られていなかったからか、往復とも30名にも満たない客でCAも手持ち無沙汰にしていたのが思い起こされる。大赤字の為にこの路線が無くならねばいいかと本当に心配した。しかし今回は、行きはほぼ満席、帰りも7割程度の乗客でホッとした。企業努力もあったのであろう。

飛び立って30分あまり経った頃食事のアナウンスがあった。CAが2種類のメニューを示すので、私は海鮮丼を選んだ。丼といってもどんぶりではなく、四角いケースにご飯がありその上にいろいろな海の幸が乗っていてとても美味しい。「お酒もご用意してあります」の声に下戸の私だが、つい「コップに半分下さい」と言ってしまった。CAの話では、9月から国際便で宮城県産の「一ノ蔵」をサービスに加えたとのこと。口当たりがよく美味しくいただいた。ちなみに「一ノ蔵」は4つの酒造会社が一つになり、1973年に誕生した。米どころ宮城県産の酒米で醸造しているそうだ。ともかく機内食は日本の飛行機が世界一だとお世辞抜きで思う。

午後5時半ころ成田空港を飛び立った947便は、前方のスクリーンを見ると東シナ海を横切った後、長江に絡みつくようにして順調に飛行を続け、現地時間の午後10時前に着陸した。〈以下中国時間で表示〉定刻より30分早く着いたが、所要時間はおよそ5時間半であった。少し不満だったのは、機長が外国人で英語しか話さなかったため言っていることがほとんどわからなかったこと、そして仕方ないことではあるが、機内のほとんどは中国人で話声が大きく眠りを妨げられたことである。

税関を無事通過して出口に向かうと、大連から一足先に着いた友人が手を振っていた。何度も書くが異国の地で友人と再会するのは誠に嬉しいこ

とである。^{きゅうかつ}久闊^{じょ}を叙し、握手を交わしてタクシーに乗り込んだ。20分くらい経って23時頃ホテルに着いた。ホテルの名は「成都城市理想酒店」である。市の中心にある天府広場から比較的に近いところにある。住所は、成都市過街楼街17号である。このホテルは23日から2泊連泊の予約をしてあるが、2度と泊まりたくないホテルとなった。詳しくは、本シリーズの23日のところで触れたい。

今夜はシャワーを浴びて早めに寝ることにした。明日は、峨眉山に登りそのあと樂山大仏のある樂山まで行くので、朝早くホテルを出発しなければならないからだ。峨眉山に登る日を明日20日にしたのは、仏教の信仰心が篤い友人が希望したからである。彼によると10月20日は、旧暦で9月1日に当たるそうである。中国では毎月1日と15日は近くの寺院にお参りに行く人が多いそうだ。夜遅く着いたので朝は本当はゆっくりしたかったが、彼の意向を尊重した。中国はやはり旧暦が大きく影響している。

ここで、峨眉山の紹介をして、本稿を終わりたい。成都の南西約160kmの所に峨眉山は有る。複数の峰を総称して「峨眉山」と呼んでいるが、最高峰の万仏頂は3099メートルである。前述の通り1996年に樂山大仏と合わせて、世界遺産(文化と自然の複合遺産)に登録された。複合遺産となったのは、山々の美しさ、金頂で見られるご来光等と共に山中にある、数多の歴史的宗教建造物のためである。「金頂」とは、3077メートルの高さのもう一つの頂で、太陽の下で華蔵寺が金色に輝いて見えることからその名が付いた。峨眉山は、前述のように中国四大仏教聖地の一つで普賢菩薩の聖地として人々に崇められている。他の三つは、山西省の五台山(文殊菩薩)、浙江省の普陀山(観音菩薩)、安徽省の九華山(地藏菩薩)である。私は、これまで普陀山には、2014年に行ったが私も仏教徒の端くれなので、後の二つをここ数年内に行ってみようと思っている。(続く)

➤ エスペラントに共感した北一輝

山鹿泰治に会った北一輝はエスペラントに非常に関心を持ちました。

北は、辛亥革命に参加した宋教仁ら中国の革命家らと交流し、階級制度の廃止や労働組合などの社会主義に傾倒する一方、著作『日本改造法案大綱』では、クーデターを起こし戒厳令を敷き、強権による国家社会主義的な政体の導入などを主張しました。そのため政府からは危険思想家として見られていました。しかし、一部の革新将校らには大きな影響を与えました。

1936年、北に影響を受けたであろう青年将校らは二・二六事件を起こしました。政府は、事件を起こした青年将校らが『日本改造法案大綱』に感化され決起したとみなし、北を「事件の理論的指導者の一人」として、首謀者の一人とされた陸軍少尉の西田税らとともに銃殺刑に処しました。そのような北が山鹿に会いエスペラントに共感したのです。

北の『日本改造法案大綱』には、「英語を廃してエスペラントを課し第二国語とす」と書かれています。その理由を北はこう書いています。

「英語は国語教育として必要にもあらず、また義務にもあらず。現代日本の進歩において英語国民が世界的知識の供給者にあらず。また日本人は英語を強制せらるる英領インド人にあらず。英語が日本人の思想に与つつある害毒は英国人が支那人を亡国民たらしめたるアヘン輸入と同じ」で、英語を駆逐することは、国家改造にとって急務であるとまで言い、「成年者が三月または半年にて足る国際語（エスペラントのこと）の修得が、中学程度の児童、一、二年にて完成すべきことは、英語が五年間没頭してなお何の実用に応ずる完成を得ざる比にあらず。児童は国民教育期間中に世界的常識を得べし」と書いてエスペラントを国際語とし

て非常に評価したのです。もし二・二六事件が成功し、北の影響を受けた青年将校らの主導する政府が成立したら、日本は外国との交流にエスペラントを使っていたかもしれません。

➤ SATの創立者ランティの来日

北は天皇を利用し天皇の命令によって革命を起こそうと考え、革命を人民から切り離し、ファシスト的な傾向があった故に私は、北を擁護する気にはなれません。しかし英語偏重主義を批判し、エスペラントを国際語として活用すべし、と言った彼の主張には耳を傾けるべき点があるかと思えます。

山鹿は北と親しく付き合う一方、エスペラント活動も衰えることなく積極的に海外のエスペランティストと文通していました。その中の一人にE・ランティがいました。

ランティはSAT（全世界無国民性協会）の創立者です。SATについては以前にもここで紹介したことがあります。SATのSはSennacieco「無国民性」です。国家や国民、民族という単位を認めず、国家に支配された世界のほとんどの言語＝国語、国家語に対峙するものとして、エスペラントを被支配者、解放の言語としてとらえていました。SATはそういう考えに共鳴した人たちのエスペランティストの世界的組織です。

日本に限らず、世界のエスペランティストたちの中には、政治や社会に関わらないでおこう、ただエスペラントを普及

することがエスペラント運動であるという人たちと、社会に関わり平和運動や国際的な連帯活動としてエスペラントを考えるという人たちの二つに大きく分かれています。多くのエスペランティストは中立主義の名のもと、政治や社会に積極的に関わりたくしません。ランティは、アナキストとして社会の進歩と変革のために闘おうとSATを創立し、また反戦

第21回 中国の大連に飛び立つ 山鹿泰治Ⅲ
ジャーナリスト、方正友好交流の会事務局長、著書『ある華僑の戦後日中関係史』
大類 善啓（おおるい よしひろ）

主義者でアナキストでしたので、やはり共産党系の人たち、いわゆるボルシェビキ派とも当然、対立していました。

そのランティが1936年(昭和11年)2月、前触れもなく突然、日本にやってきたのです。旅券には本名のE・アダムとあったので横浜税関はランティと気づかず、なんなく入国できました。しかしエスペラント学会を訪問したところ、誰かが警視庁に知らせたようで尾行がつかまりました。

山鹿はこう書いています。「私とランティは、10年も前から文通していた。ランティが会いたいと言っていると聞いて電話をかけると、ランティは私の注意通り尾行をまいて、車でやってきた。会ってみると、前に写真で見た彼とは全然違って、白髪の老人だった」。

ボルシェビキ派と対立し、警察にまで追われる身になったランティは亡命先を求めて日本にやってきたのです。仏教にも関心があったこともあり日本に来ましたが、日本の警察は彼の活動を許しませんでした。ランティはその後日本を去り、ニュージーランドへ行き、さらにメキシコに渡り、そこでピストル自殺をして波乱の一生を終えました。

▶ スペイン戦争勃発

1936年7月、スペインで戦争が起こりました。スペイン人民共和国政府に対して北アフリカのモロッコに駐屯していたフランコ将軍が反乱を起こしたのです。人民共和政府部内にもいる軍部やカトリックなどがフランコ側につきました。さらにフランコは、ヒトラー・ドイツに応援を求め、またムッソリーニ率いるイタリアもフランコを応援しました。

これに対して世界の進歩的な人たちは、「ファシズムを許さない」と立ち上がり、義勇兵として多くの知識人たちが反フランコの闘いに参加、アーネスト・ヘミングウェイやジョージ・オーウェルのような作家やエスペランティストたちも反ファシズムの闘いに加わりました。アナルキスタ・ロートというエスペランティストたちの中隊もできて勇名をはせました。

もともとスペインではアナキストの力が強く、

このスペイン戦争では、人民戦線派とファシズム陣営との闘いになりましたが、この人民戦線派、共和国軍の中にはアナキストの力も大きく、カタロニア地方ではアナキストが束ねる地域が生まれました。

ジョージ・オーウェルは後に『カタロニア讃歌』を書きました。1960年代の半ばに日本でも翻訳され出版されたこの本を私は読み、いたく感動しました。オーウェルは、フランコ派やスターリン主義者たちを追放し、アナキストたちが創り上げた瑞々しい反権力の小宇宙をこの本で活写しています。しかしこのカタロニアも最後はフランコ派に倒されました。

山鹿は義勇兵になってスペインへ行きたいと思いました。しかし渡航する方法がありません。山鹿はパリのセンターに、日本には外人部隊で働こうというものが数十人はいると言いました。しかし返事は「志はありがたい。だが手にする武器がない。武器を買う金がほしい。義金を集めるために闘ってくれ」というものでした。そして遂に革命派は敗北しました。

▶ 戦後の山鹿泰治

その後山鹿は『老子』のエスペラント訳をし自家版100冊を印刷した後、あてもなく台湾の高雄に移住、高雄で日本の敗戦を迎えました。

1960年12月、インドのガンジーグラムで開催された戦争抵抗者インターナショナル・WRIの第10回国際大会が初めてアジアで開かれました。当時はまだ自由に海外へ行けない時代ですが山鹿は参加すべく動きました。しかし外務省は「インドでアナキズム運動をされると困る」と言い、なかなか旅券を出しません。しかし山鹿は「私はアナキストだ。それと同じようにエスペランティストだ。そして平和主義者だ。今度インドへ行くのは、WRIの大会、平和運動のためだ」と主張、旅券を獲得したのです。

平和活動に徹した山鹿ですが、翌年、脳出血で倒れ、半身不随になりましたが、「たそがれ日記」を書き続けた異色のエスペランティストも1970年12月、千葉県市川市の寓居でひっそりと亡くなりました。享年78歳でした。

東西文明の比較 (22)

▼花の都長安▲

陽光新聞社・顧問

塩澤宏宣

多くの日本人は、シルクロードに結びつけて「唐」をみているようです。そこには、仏教の伝来があります。

日本に仏教が伝来したのは6世紀中葉ですが、本格的な仏教の輸入は唐の前半期の7世紀です。唐都・長安は、ユーラシア大陸を貫くシルクロードの東のターミナル。

長安から博多・大阪・奈良・京都までを引き延ばして、それを「日本文化の源流」のひとつと考えています。「日本」という国名が成立した頃の日本は、仏教文化によって唐と結びついていました。その唐はシルクロードによって仏教文化

の栄えた西域・インドと結びついていました。当時の日本の民族形成期の高揚感と仏教に対する好印象が、千数百年の時を超えて現代日本人の遺伝子の中に受け継がれています。正倉院御物といえばシルクロードやガンダーラを連想します。仏教の原点を求めて西域からインドへ旅した三蔵法師のイメージも重なるでしょう。

インドから漢代の中国に伝来した仏教は、南北朝時代に根付き、隋唐において北朝仏教と南朝仏教が融合して、唐代には玄奘・義浄に代表される教学仏教や善導によって大成された浄土教の隆盛、さらに不空に代表される密教が加わり、歴代皇帝による保護・尊崇とが相まって、唐は中国仏教の黄金期を迎えました。それゆえ唐を仏教王国、長安を仏教都市といいます。唐代の人口は、約5000万、仏教僧侶は50万を超えていたといわれます。100人に一人が仏僧でした。

長安には正式の僧尼が2万人以上いたようです。

唐王朝は618年に、高祖・李淵により建国され、907年に朱全忠によって滅ぼされるまで、約300年続きましたが、名実ともに帝国の名にふさわしい偉容を保ったのは、630年の東突厥滅亡から755年の「安史の乱」勃発までです。安史の乱後、唐は甘粛省以西を失っただけでなく、中国本土内にも多数の地方政権の半独立を許し、それまでの唐とは全く別の小国になってしまいました。政治史的には、太宗の「貞観の治」を含む初唐と玄宗の「開元の治」を含む盛唐を合わせた前期と、中唐・晩唐を合わせた後期に分類するのが適当です。

均田制・府兵制・租庸調制に代表される「律令体制」が完成したのは初唐であり、玄宗時代には既にその崩壊が始まっていました。安史の乱は、それにとどめを刺しただけです。とはいえ、文化的繁栄は、後期にまで及び、学術・文学の分野では後世に残る名著が次々に生み出されただけでなく、文学ジャンルが多様化し、木版印刷術も普及し始めました。

盛唐期

712年、玄宗(李隆基)が即位しました。玄宗の治世の前半は開元の治と謳われ、唐の絶頂期になります。この時期、唐の^{きび}羈縻¹⁾支配と冊封政策は中央アジアにまで及びました。しかし、751年にトランスオクシアナの支配権を巡ってアッバス朝との間に起こったタラス河畔の戦い²⁾に唐は敗れました。



8世紀ごろの唐と隣国図 (Wikipedia より改変)

玄宗は、長い治世の後半には楊貴妃を溺愛して政治への意欲を失い、宰相の李林甫や楊貴妃一族の楊国忠の専横を許しました。楊国忠は、玄宗と楊貴妃に寵愛されていた節度使の安禄山と対立していました。危険を感じた安禄山は755年に反乱を起こしました。節度使とは、玄宗の時代に増加した官職で、辺境に駐留する藩師に軍事指揮権と一部の行政権を与える制度でした。北方3州の節度使を兼ね大軍を握っていた安禄山はたちまち華北を席卷し、洛陽を陥落させ大燕皇帝と称しました。都の長安を占領され玄宗は蜀に逃亡。その途中で反乱の原因を作ったとして楊貴妃と楊国忠を誅殺しました。失意の玄宗は譲位して皇太子を肅宗として即位させました。

その後、唐は名将・郭子儀らの活躍や回鶻(ウイグル)の援軍によって763年に乱を平定しました。9年に及んだ反乱は、安禄山とその死後乱を主導した配下の史思明の名をとって安史の乱と呼ばれます。この安史の乱によって、唐の国威は大きく傷付き以降、唐は次第に傾いていきます。軍事力増強のために藩鎮を増やした結果、内地の節度使も増加しました。各地に節度使が置かれた状態は、後の五大十国時代まで続きます。

唐は中国史の中で最も国際性・開放性に富んだ王朝でした。しかも中国文化自体も最高潮に達した輝かしい時代でした。7～8世紀の唐は名実ともに世界一の帝国であり、その世界主義は、国内諸都市における外国人居留地の存在、外国人使節・留学生・商人・芸人の偏在、外交・商業ルートによる外国文物の流入、芸術・文化における西域趣味、道教・儒教に対抗した仏教、さらにマニ教・景教・祆教などなどによって特徴づけられます。いずれもシルクロードと密接な関係を持っています。唐の都、長安は「花の都」といえるでしょう。

唐は日本の先生だった

「古事記」の時代から明治維新まで、漢文は日本の公用語でした。飛鳥・奈良・平安・鎌倉・室町・江戸時代と、わが国の役人や知識人たちは正式な書写言語として漢文ないしは日本語混じりの変体漢文を使用していました。その間に大量の漢語がそのまま

日本語に入って定着しました。近世以前の日本の文字文化は、中国のお陰で進展してきたのです。

近代ヨーロッパより1000年も早く、科挙という実力主義で「民主的」な高級官吏登用試験を採用したのは中国(隋唐)です。科挙受験のために必要だったのは儒学です。儒教精神に基づく儒学は政治経済を重視したという点でまさに「実学」であったのに対して、仏教・道教の学問は「虚学」でした。

唐が中央アジアのトルファン盆地にあった魏氏高昌国を併呑して西域支配の道を開いた640年から、安史の乱が勃発する755年までが、唐がシルクロード東部を直接押さえ、東西南北の文物の移動と人的交流がとりわけ活発に行われた時代でした。この時代を中心に、日本は実に多くの物事を学びました。それ故日本は、必然的に長安・洛陽など唐の大都市を通じて、シルクロードとも密接に繋がりました。唐とシルクロードは、日本史の一部であるといえます。

唐は漢民族王朝ではない

唐建国の中心は鮮卑系漢人と匈奴の一部でした。当時の中央アジア東部を支配していたのは遊牧国家・突厥第一帝国(東西両突厥552～630年)でした。この強大な勢力を打倒することなしに、唐が人類史上に燦然と輝く世界帝国になることはありませんでした。ただし、唐と突厥との国際関係は、唐に先行する拓跋(鮮卑族の一部族)国家である東魏・西魏・北齊・北周・隋にまで遡らなければなりません。

隋を開いた楊氏も唐を開いた李氏も鮮卑系の「関隴集團」の出身でした。関隴集團とは、北魏の国防を担うエリート部隊であった六鎮³⁾の出身者が、北魏分裂後に関中盆地に移動して、現地の豪族と手を組んで出来上がった胡漢融合集團のことです。唐代までに活躍した匈奴・鮮卑・氐・羌・羯・柔然・高車・突厥・鉄勒・吐谷渾・カルルク・奚・契丹など中央アジアに存在していた各民族は、秦漢時代に「漢民族」に組み込まれていました。唐の世界主義・国際性・開放性は、もともと唐が漢民族と異民族の血と文化が混じり合うことによって生み出されたエネルギーにより創建された国家に由来するの

でしょう。しかも一貫して多民族国家だったことにより促進されたものです。それは後のモンゴル帝国や現代のアメリカ合衆国と共通することです。唐には突厥人もいればソグト人・ペルシャ人あるいは高仙芝・慧超こうせんし すいちようのような朝鮮人も阿倍仲麻呂や藤原清河いのみなりや井真成のような日本人もいたのです。

■注

1) 羈縻きび：羈は馬の面繫（おもがい）、縻は牛の鼻綱を意味し、漢字二文字でつなぎ止める、牽制するの意味。中国諸王朝が外族内部の行政組織をそのままにして外族を統御する伝統的政策をいう。唐では羈縻州といって外族の部落に州や県をおき、その首領に唐の官名である都督や刺史を与え、都護府がこれを統括した。

(コトバンクより抜粋)

2) タラス河畔の戦い（中央アジアの覇権争い）：751年7月、ズィヤードの率いるアッバース朝軍と高仙芝率いる唐軍は、天山山脈西北麓のタラス河畔（現在のキルギス領）で衝突した。戦いの最中、唐軍に加わっていた天山北麓の遊牧民カルクがアッバース朝軍に寝返ったため、唐軍は壊滅し数千人を残すのみとなった。高仙芝自身は、部下の李嗣業がフェルガーナの軍中に血路を開くことで撤退には成功したものの、多くの兵士が捕虜となった。唐側の被害は甚大で、イブン・アルの「史」によると、アッバース朝軍は「唐軍5万人を殺し、2万人を捕らえた」という。

(Wikipediaより抜粋)

3) 六鎮：北魏において、北方の民族の侵入を防ぐために辺境地帯に置かれた以下の鎮（沃野、懐朔、武川、撫冥、柔玄、懐荒）を六鎮という。

(Wikipediaより抜粋)

「漢詩の会」たより⑱

李清照の〈詞〉如夢令を味わう

(2018年1月28日)

報告：花岡風子

2018年の漢詩の会は、李清照りせいしょうのユーモラスな〈詞〉ツを味わうことから始まりました。李清照といえば中国文学史上最高の女流詩人として非常に名高く、また現代中国でも、特に女性たちの間で大人気を誇る詩人です。

北宋末期の1084年、山東省済南で文人の娘として生まれ、18歳で金石学者の趙明誠ちやうめいせいと結婚。夫の専門である金石文の蒐集、研究を助け『金石録』を完成させました。李清照は非常な才媛で、趙明誠とは相思相愛の仲でした。二人は共に酒を酌み交わしたり詩を唱和したりしていたそうです。当時としては珍しく、夫婦は共通の目標に向かって進んでいたのです。彼女はまた非常に卓越した文学センスを持った詩人であり、同時に女李白とでも言うべき酒豪で、男性の文人達と詩酒を交えて堂々と渡り合った、文字通りの女傑だったようです。項羽の事跡を歌った男性的な絶句も残しています。

一方、夫君の趙明誠は優秀な学者でしたが、どうやら詩のセンスは奥方には遠く及ばなかったようで、彼女がまとめた研究には、夫君の詩が一首も入っていないそうです。「旦那の詩が自分より遥かに

劣っていたので、後世に恥を残さないために抹殺したのかな。だとすれば、これも一種の夫婦愛ですかねえ。」と植田先生。

そんな仲睦まじい夫婦でしたが、金軍の侵攻、北宋の滅亡(1126年)、王朝の南渡という国難の後、夫の趙明誠は病気で亡くなってしまいます。戦乱に巻き込まれて一家離散という憂き目に遭った上に、再会後の夫との死別という二重の不幸が襲いかかりました。相次ぐ戦乱により、膨大な蔵書、大量の文具、書画、骨董、拓本などの資料を次々と失い、悲惨な晩年を送ったと伝えられていますが、正確な没年も分からないそうです。

しかし、夫亡き後も夫の研究を後世に残し、また自身の詞文集『漱玉詞』(後世の編)を残すという偉業を成し遂げた李清照。波瀾万丈の時代を生きぬいた女流詩人の人生ドラマに一同すっかり魅了されたところで、今回の〈詞〉の鑑賞となりました。

今回の〈詞〉は〔如夢令じよむれい〕という作品です。「令」とは小令という短い歌のことです。「夢小唄」といった感じでしょうか。以前にもご紹介しましたが、〈詞〉にはそれぞれに決められた形式の楽曲名が付

rú mèng lìng
如梦令

zuò zhě lǐ qīng zhào
作者：李清照

zuó yè yǔ shū fēng zhòu
昨夜雨疏风骤
nóng shuì bú xiāo cán jiǔ
浓睡不消残酒
shì wèn juǎn lián rén
试问卷帘人
què dào hǎi táng yī jiù
却道海棠依旧
zhī fǒu zhī fǒu
知否知否
yīng shì lǜ féi hóng shòu
应是绿肥红瘦

如梦令

作者：李清照

昨夜は激しい風ちの中を大粒の雨が降っていた。
ぐっすり眠ったが、まだ昨夜の酔いが醒めきらない。
寝坊している私のところに、誰かが簾を挙げに入ってきた。
ちなみに「庭のカイドウの花はどうなった？」と尋ねてみると、
こともあろうに「昨日のままですよ」と答えるではないか。
「そんなはずはないでしょう、分かっていないわね、あなた！
雨で花が散ってしまって、葉ばかりになっているはずよ」と私はつぶやく。

いています。その楽曲名のことを〈詞牌〉と言いま
す。作者は自分の選んだ〈詞牌〉の形式に合わせて、
まるで替え歌を作るように歌詞を付けます。〔如梦
令〕とは、その〈詞牌〉に付けられた名称の一つで、
歌詞の題名ではありません。李清照のこの〈詞〉に
は歌詞の内容を表わす題名がついていませんが、
〈詞牌〉の題名さえあれば歌詞の題名は付けても付
けなくてもかまわないのです。

〈詞〉はもともと唐の都の王侯貴族のために、芸妓
たちが歌っていた演歌のようなもので、〈詞牌〉の
種類はなんと500以上もあるそうです。〈詞〉は本
来女性の芸能ですから、女性的な趣向の歌詞(和歌
で言えばたおやめぶり)が多いのですが、今日残る
作品の多くは男性の詩人が女性の気持ちなって詠
ったものです。しかし、李清照はその特徴を生かし
て女性にしか書けないような作品を残しています。

「いやあ、この人の詩には二日酔いが多いんです
よ。呑んだくれの奥様が朝寝坊しているところに、
召使いが入ってきて、奥様、朝ですよ、とばかりに
簾を上げるんですがね。「庭のカイドウの花はどう
なったかしら？」と尋ねるとこの召使いは田舎育ち
の、働き者だが無粋なイモね一ちゃん。美的センス
とは程遠い人。花なんかに興味がないんですよ。二
日酔いの奥様の寝姿を見てウンザリしている。な
ので、外を見もしないで『昨日と変わっていません
よ』と答えたもんだから、この女主人、少々カツン
ときたのか、『あんなにひどい雨風で、花が散って

ないわけがないでしょうが！』とぶつぶつ小言をい
っているわけなんですよ。知っているなら訊かな
ければいいのにねえ……。」

植田先生の解説がまたユーモアたっぷりです。笑わ
ずにいられません。二日酔いで寝坊を繰り返す、呑
んだくれの風流な奥様と、田舎育ちの花より団子
の召使いのユーモラスなやり取りを切り取った日
常の一コマ。こうしてみると、なるほど男性には
書けない魅力に溢れています。

「女性の作った女性的な詩ですが、どこかピリッ
としたものを感じます。長谷川町子さんの4コマ
漫画に通じるものを感じるんですけどね」

「私も昔読んだ時には意味がよく分からなかった
んですよ。意味は分かったつもりでも、どこが面白
いか分からない。しかし何度も読んでみると場面
が浮かんできて、ああ、何と面白いなあ、と感じる
ようになりました。私のような無粋な男にはこの
詩の意味がすぐにはピンとこなかったんでしょ
うな」と植田先生。

ところで、この簾を巻き上げに来た人は夫の趙
明誠であるという説もあるそうです。「旦那が文学
的センスに欠けるということを言いたかった、と
いうことでしょうけどね。それでは旦那があまり
にもかわいそう。そこまで言わなくてもいいでし
ょう」と植田先生。やはりお寝坊の詩人の奥様と対
照的な村娘の、たわいもない会話として読んだ方
が4コマ漫画を楽しめる気がします。

最後の句の「緑肥紅瘦」は四字熟語となって後世の詩人もよく真似て使っているようですが、なかなか素敵な表現です。日本だと桜が散って葉桜になりかけの頃でしょうか。こういう晩春の情景が詞の世界では最も寂しい情景なのだそうです。ここでホトトギスが鳴いたりすると一層寂しさを掻き立てるそうです。

「青春が去っていくというわけで、晩春とは若い女性にとっては一番寂しい季節なんですね」という植田先生の解説を聞いて、へえ、そうなのかしら、ホトトギスは風流だし、実のところ晩春も大好きな私。もしかして、この詩の中で簾を巻き上げに来た鈍感女なのでは？と肩をすくめた次第でした。

詩の解説の後はいつもの朗読練習をして、最後に植田先生がこの詞にメロディーを付けて歌って下さいました。朗々とした素敵な歌声に一同うっとりし、拍手喝采でした。

漢詩の世界といえば男性の世界。そんな中で彗星の如く現れた李清照。男性詩人には詠めない独特の〈詞〉を残しながらも、号は男性風に易安居士と名乗ったスケールの大きな才女。

「こんな優秀な女性を奥さんにもらうと旦那としては大変だろうなあ。それでも仲良くやっていたんだから、夫も偉いなあと思いますね。奥さんのお陰で後世に名を残せたわけですから、正に理想の夫婦、ですね。一般の男性にとっては、どうかわかりませんが……。また、李清照は再婚した後、すぐ別れたという説もあるんですけどね、元の旦那が良すぎたんですねえ。」

煌めく才能を持ち、夫と愛を育んだ魅力ある女性。また大酒飲みで男性達と対等に渡りあうという豪放さ、そして何より、時代のもたらした不幸にも屈せず夫と自分の作品、そして名声を後世に残すという結果を出す強さも併せ持った李清照。中国女性から尊敬と絶大な人気を得ているわけですね。

さて、会の最後はメンバーの質問に次々とお答え下さるコーナーもあり、参加者にとっては楽しいひと時でした。

そんなフリートークの中で植田先生がして下さいましたお話を最後に報告を締めくくろうと思います。「若い頃、知識だけを詰め込んでいた時は、漢詩はちっとも面白くなくてね、年を重ねるごとに面白いなあ、と思うようになったんです。ところで漢詩は高齢者には良いですよ、認知症予防になると思いますよ(笑)。詩の鑑賞だけでなく作詩もすればもっと良いですね。論語が認知症に良いと言ったお医者さんがいらっしゃいましたが、私なんかは漢詩も効くんじゃないかと思っているんですよ」

最近スマホで漢詩を作れる時代になりましたし、私もあと10年、20年の人生経験を積んだら漢詩を作ってみようかと思いました。その為に各題材に困らぬよう、まだあと20年、興味の赴くままに色々楽しみたいものだなあ、というのが正直な感想。晩春を憂う気持ちなどどこ吹く風というアラフォー女子の報告でした。

‘わんりい’は、毎年4月から新年度になります。ご継続をよろしく願います。また、新入会をいつでも歓迎します。途中入会の方には会費の割引があります。お問い合わせください。

年会費：1500円 入会金なし

郵便局振替口座：0180-5-134011 ‘わんりい’

‘わんりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等を開催し文化的交流を通して国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。入会されると、

①年10回(2月・8月を除く)おたよりをお送りします。

②‘わんりい’の活動の全てに参加できます。

問合せ：044-986-4195(寺西)

◆インターネット会員の制度もあります。アドレスを頂いた方に、毎月、カラーの美しい‘わんりい’をPDFファイルでお送りします。こちらは無料です。

◆町田各所でご自由に取って頂けます。上記へお問い合わせください。

使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を！

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、古切手と書き損じ葉書を集めています。各位からいつもたくさんの切手をお届け頂いて感謝申し上げます。古切手は周囲を1cmほどを残して切り取り、おついでに折に田井にお渡し下さい。

樹木・花にまつわる物語

第2回 ショカツサイ 諸葛菜

写真と文 河本義宣

ショカツサイは江戸時代(寛文年間:17世紀)に渡来した中国原産の帰化植物です。中国名「諸葛菜」をそのまま使って音読みしたのが名前になっています。

日本名をオオアラセイトウといい漢字表記は大紫羅欄花で名付け親は牧野富太郎です。アブラナ科。

中国名「諸葛菜」は言うまでもなく諸葛孔明に因んで付けられた名前です。

孔明は宿敵・魏の曹操を打ち破る(北伐)ための遠征軍を発しますが、その前に後顧の憂いを除くため、南征(225年)します。荒ぶれる南蛮の王・孟獲の性格を見抜いていた孔明は、孟獲を七度捉えて七度放ちます。四字熟語「七縦七禽^{しちじゆうしちきん}」の起源。孟獲は七度目に放された時、ついに孔明に心服し、蜀漢への帰順を誓いました。平定後、帰路途中の瀘水にさし掛かったとき、川が氾濫して渡れません。土地の言い伝えでは「蛮人49人の首を切って川の神に供えれば、氾濫は収まる」と言う。孔明は人身御供の悪習を立ち切る機会と捉え、料理番を



町田市恩田川河畔にて(2017年3月12日)

呼んで、小麦粉をこねて丸めた中に羊や豚の肉を入れ、人の頭に見立てものを49個つくらせ、それを川に投げ入れたところ翌日には氾濫も収まり無事帰還しました。この時作った蛮人の頭「蛮頭」が訛って「饅頭」となりました。この故事が饅頭の起源と謂われています。いよいよ、北伐軍の出兵です。出発に先立ち、孔明は後主劉禅に「前出師表^注」を奏上しました。

時に227年で、以降231年に亘って4回遠征軍を出しました。一部の兵を駐屯(屯田)させました。孔明は兵士たちの健康を考えて、春一番に芽吹くダイコンの仲間の野菜の種を持たせ、屯田地で播種・栽培して兵士の食糧にしました。

この故事に因んで、後世の人がこの野菜を「諸葛菜」と呼ぶようになりました。実際は写真に見る植物ではなく、今、私たちが食べている「かぶ」だったという話もあります。4回目の遠征の時、孔明は五丈原で病を得て死にます。死に際して「私の死を知れば、敵将・司馬仲達^{しばちゆうたつ}は一気に襲いかかってくる。私の屍は生きているがごとく馬車に乗せて撤退するように」と遺言しました。孔明の死を知った仲達は一気に襲い掛かりました。前を行く馬車を見ると孔明はしゃんと座しているではないか。「囚られたか」仲達は踵を返して退散しました。この故事によって、「死せる孔明、生ける仲達を走らす」の成句を残しました。

(「饅頭」の故事はWikipediaなど参考にしました)

■注

前出師表(すいしのひょう): 前出師の表臣下が出陣する際に君主に奉る文書。特に断らない限り諸葛亮の「出師表」を指す。(Wikipediaより)



成都武侯祠前の「前出師表」碑。人物はたまたま前に立ってしまった中国の人で本稿と直接関係ありません。

(2017年6月20日)

海外出張の思い出 (旧ソ連・ノボロシースク編 ②)

高島 敬明

1. クラスノダール到着

クラスノダールは、少し紛らわしいのですが「クラスノダール地方」の中心都市なのです。「クラスノダール地方」とはロシアのいくつもの行政区分の一つで、地方旗まで持っています。面積は約7万5千平方キロもあり、日本の面積の20%もの広さで、人口は2014年の資料では約540万人となっているのです。その中にある「クラスノダール市」は、面積が841平方キロ。日本人も何人か住んでいるとかで、当時は30万人ぐらい(2008年の資料では約70万人)の立派な都市でした。市の名前はロシア語で〈赤い恵み〉という意味だそうです。

着陸して早速、皆腰を抜かさばかりの事が起こりました。機内では皆トイレは我慢して間もなく着くからと、着陸してゆっくり用を足したいと思っていたと思うのですが、売店のすぐ横のトイレに行ってみるとびっくり仰天。待機場所からよく見えるトイレには幅1メートルぐらいのボタン式のドアがあるだけで、膝から下は丸見え、便座はないタイプでした。お互いの顔はドアの上に出て、いわゆる「ニーハオ」トイレなので皆しり込みしていましたが、生理現象には勝てず仕方なく「俺が一番先に行くよ」と強がりを言いながら行くものが出始めました。お互い膝から下の新調したズボン、新品の靴が見え全く様になりません。皆大笑いです。とは言ってもこれからの3時間あまりのバスのことを考えれば笑ってばかりでは済まされず、もうどうにでもなれという気持ちになり、我慢できない順に済ませて行きました。最後は何とも思わなくなるから不思議ですね。

皆すっかりとした顔になってから、今回我々と一緒に仕事をするエンジニアリング会社のソ連製の新車のバスに乗り込みました。クラスノダールからノボロシースクまでは直線距離では100キロくらいですが、途中から曲がりくねった山道を行くわけですから150キロはあったと思います。最初は道路は舗装されており快調でしたが、砂利の道になって状況は一変しました。クッションの役目をするショックアブソ

ーバーが付いていないのでは、と思うくらい穴ぼこをそのまま拾って行き曲がるときは反対側に流されるようです。腰、背骨さらに首の付け根まで痛くなるほどです。また閉口したのは、道路のほこりが床のど



通訳のCさん

こからか入っているようで座席もどこもかしこも白くなっていました。おそらく床の配線や配管の穴が完全に塞がれていないからなのでしょう。自動車は日本より相当遅れているなと感じました。

そのうち峠に差し掛かり、山間部を走っているときです。何回も形の違った十字架のお墓が目につくようになりました。共産圏でもキリスト教なんだとぼんやり考えているとき、プカプカと賑やかな楽団を先頭に軍用大型トラックを従えて来る一団に出くわしました。バスと高さが同じになり追い越しざまに荷台を見ると、棺桶があり花で飾られた顔が見えました。魔法の国のおばあさんのような鼻の高いお年寄りのご遺体でした。最初から縁起でもないな、このプロジェクトはケチが付いたのかな、うまく行くのかな、と心配になりました。しかし皆には言わず自分の中だけに納めました。



宿舎のブリガンチーナホテル(1978. 4)



ノボロシースク市内にいくつかある花市場の一つ(1978. 10)

2. ノボロシースク到着

陽が少し沈みかけた頃、ようやくノボロシースク(ロシア語で新しいロシアの町の意味)の街に入りました。無事に宿舎に到着。我々工事関係の人間の宿舎は、港の岸壁の近くの長期航海からの帰還船員の家族の宿泊施設です。一方エンジニアリング会社の技術者と通訳を合せた約15名は市内の高級な「ブリガンチーナホテル」の滞在でした。宿舎は予め部屋は決まっていたのですが、寮長の私から部屋割りを指示します。

作業員は部屋ごとに4～5人ずつ詰め込まれますが、私の部屋は大きな部屋でしかも一人で占領です。労働者の国ですが、労働者の身分に対する差別は大変厳しいのです。私には、部屋付きの女性が何人も付き、シーツを取り換えるだけの人、部屋の掃除だけする人、私の部屋のクルーチ(鍵)の管理だけする人、意味が分からないのですが廊下の端に黙って座っている人、ほかの部屋にはこのような人はいません。

エンジニアリング会社の通訳に言わせれば、私を監視している人達だと教えられました。そう言えば廊下の端に座っている人は、ソ連の旗がなびく赤い共産党員のバッジをいつも誇らしげに付けていました。共産党員だそうですが、この先あまり共産党員に会うことは有りませんでした。珍しいのだそうです。夕食は先に来ていた日本のまかない会社「魚国」の皆さんの計らいで無事に終わり、2日目の夜が更けていきました。

3. ノボロシースクでの生活スタート

3日目の朝が来ました。疲れていたのでぐっすり寝たつもりでしたが、時差(日本とは5～6時間くらい)と緊張感からか暗いうちから目が覚めてしまいました。これから1年間、仕事の中心となる黒海の港を眺めていましたが、ソ連邦崩壊の10年あまり前でしたので光の少ない味気ない光景であったのを思い出します。海

ばかりに気を取られていましたが、背後の海に沿って走る山並みを見ると草木の少ない白い肌の山々が連なっていました。この山々がそれほど遠くないソチからトルコまで連なるのだと思うと感無量でした。連なる山々はカフカス山脈といいます。「ソチ」と言えば、ロシア随一の保養地で2014年冬季オリンピックが開催されたことで世界的にも有名になりました。

朝食を済ませた午前10時頃、日本でお会いしたエンジニアリング会社のYプロジェクトマネージャー(以下プロマネ)、Oサブマネージャーら6人が突然来訪されました。現地の状況について説明したいとのことと、「全員娯楽室に集めていただけますか」と要請されましたので、声を掛け合い床にマットが敷いてある広い部屋に向かいました。この部屋には我々日本人のために片隅に日本の図書や将棋盤などが置かれており、寝そべてくつろげるようにしてありました。ここで1年間過ごすのかと思うと何とも言えない気持ちになりました。途中で一時帰国は無いのですから。家内も1年間不安だったと思います。申し訳なかったと思います。延べ270人くらいがここを生活の拠点としたのですが、その殆どは全体の工程(配管、電気計装、保温、ペンキ等等)の中で自分の仕事が終われば帰国する人たちでした。

さて娯楽室に全員集合の後、歓迎の挨拶がありスタッフの皆さんの紹介が始まりました。Yプロマネ、Oサブマネの他、もう一人の男性のMさんは工程管理のエンジニアだそうです。そのほかは日本人の女性が3人いて、いずれも独身で通訳と紹介されました。以下に簡単に彼女たちを紹介して本稿を終わりとします。

★Aさん…ロシア語、英語の通訳、東大出身のロシア人の彼氏がいた。30歳前半。

★Bさん…東京外大を出たばかりのロシア語通訳、24～5歳。

★Cさん…樺太から15歳の時日本に帰って来たロシア語通訳。ロシア語は完璧。45歳くらい。

女性3人が加わり華やかでいいのですが、これから仕事を進める中でたくましいロシアの男たちと対等に渡り合えそうなのはCさんだけで、ほかの二人は体も華奢で声も頼りなく、このプロジェクトは持つのかなと正直不安を感じました。この時代ロシア語通訳が極端に少なかったのです。

(続く)

第2章 高鳳蓮中期の剪紙

文と写真 周路

翻訳：有為楠君代

二十世紀90年代の中後期は、高鳳蓮の剪紙にとって、中期の段階と言えるでしょう。この時期、子供たちは既に成人し、舅を見送り、家の経済状況は以前に比べてかなり好転していました。彼女は、多くの時間を剪紙制作に充て、剪紙で生計を立てることができるようになりました。これまでの生活体験や、伝統的な剪紙の図柄に対する潜在的な反発などが、彼女の剪紙の構想に広がりを持たせ、題材を豊富にし、個性的な作品を生み出す原動力になりました。剪紙が彼女にもたらした栄光は、かつて彼女が率先して行動し、範を垂れた村の幹部としての輝きをはるかに上回り、剪紙から得る経済的恩恵は、何十年もの辛酸を極めた人生を償って余りあるものでした。

この時期、テレビ・新聞などのメディアは民間芸術の掘り起こしを開始したところでしたが、陝北民間美術の先駆けとなった安塞県は、老人たちが相次いで世を去り、後を引き継ぐ中年の人々は、古い殻に閉じこもり、先人の模倣にとらわれて次第に先駆者の地位を滑り落ちて行きました。またこの頃から、剪紙などの民間美術品も市場で売られるようになり、多くの民間芸術に携わる人たちは貧困を脱することが出来るようになりました。しかし、売られる剪紙の質は玉石混交で、人気のある剪紙の複製品がはびこるようになり、民間美術本来の意義がすっかり失われてしまったのでした。こんな時期に出現した高鳳蓮の剪紙作品は、各展覧会で脚光を浴び、矢継ぎ早に大賞を獲得しました。専門家や学者たちが高鳳蓮を研究対象として取り上げるようになり、彼女の名声は陝北地方全域に知れ亘ることになりました。

高鳳蓮の作品の特色を一言で述べると、大胆で物怖じしない作風と言うことが出来るでしょう。その最大の特徴は、全ての動物・人物の形態が、実際の具体的形状を抜け出して、一見、茫洋としているのですが、図柄を子細に見ると異なった物の形が合わさって成り立っています。

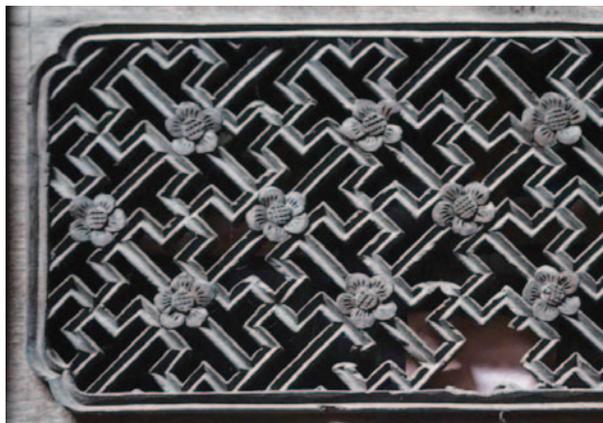
高鳳蓮の剪紙における人物の眼は、初期のころから、伝統的な丸い目玉や魚型の眼の形ではなく、代わりに2本の線で弧を描いたり、或いは花の形のような模様を使ったりしています。高鳳蓮によれば「人間の眼は、キラキラ輝いています。花を目にすれば、目の表情が伝えられます」と言います。高鳳蓮の剪紙の中の男性の眼は、一般に牡丹の花で、女性の眼は蓮の花で表します。牡丹は富貴の、蓮は純潔の象徴だからだそうです。

彼女は、竜王の剪紙の中で、両眼を2匹の小さな竜に替え、両腕、両足、両方の耳にも竜を飾りに付けました。竜王本体に、8匹の小さな竜を加えることで、全部で9匹の竜を描きました。九と言う数字は、民間では無限の意味を持ち、竜王が万能であることを表します。人々は、竜王を祀り、竜王に気候の順調、五穀豊穰、国家安泰、一家団欒を祈るのです。90年代の高鳳蓮の剪紙は、ますます個性的になり成熟して行きました。

高鳳蓮自身の構想で剪られる作品が増していく中で、剪紙の題材は、太古の神話、民間伝説、身近諸事へと広がって行き、「仙女降下」、「竜人」、「スズメを飲む蛇」、「竜王」、「梁山伯と祝英台」、「二十四孝^注」、「黄河を渡る」、「糸紡ぎ」、「地を耕す」、「老いた二人」など、彼女がそれまでに見聞し、或いは経験したことが剪紙作品として生み出されて行きました。造形は更に大胆に、奔放になり、人情味溢れるものになって来ました。民間美術研究者の啓発によって、「天を知り、地を知り、祖先を知り、神を知る」を表す符合「卍」が剪紙の装飾に付けられるようになりました。

著名な剪紙研究者である靳之林氏が、自著「中国民間剪紙と高鳳蓮の剪紙芸術」の中の一文で、次のように評価しています。

「高鳳蓮の剪紙の虎は、自然界にいる虎の形ではなく、虎で天を表し、太陽を表して、止むことなく輪廻



かんなん
皖南(安徽省長江以南の地域)古民家の中で
使用されている「卍」の窓格子



「飛ぶ馬」の「卍」

れたといえます。

そこで、私は高鳳蓮の動物、草花、人物などの図形を早期から最近の作品までを調べてみて、単独の図柄にしる、複数の図柄を組み合わせたものにしる、形式的に似通っているの

を繰り返す丸い宇宙を表現している。「卍」の符号を使用して、止むことなく巡る天・太陽・宇宙の輪廻を表現することで、原始哲学の符号「卍」の意味をさらに深め、発展させているのだ。更に虎の四肢を、大胆にも四方へ広げ、虎と「卍」の形を合わせることで、生き生きとした芸術的イメージを作り出している。

私は、彼女に訊ねたことがありました。「どうして、虎の4本の足を四方に伸ばすことを思いついたのですか？」彼女ははともあっさりと「これは飛んでる虎よ。天から降りてきたのよ」と答えました。

延安の著名な民族研究者・宋如新氏は、「卍」の字形は、魏の国の古代文字の中では、木を擦り合わせ火を起こすという意味があり、太陽をイメージする文字だったものが、陝北の人々の間で「卍」の模様に変化して、動物の尻尾などの装飾として用いられ、「陽性」を表すようになったものだと話しています。同時に、「万」という文字とのかかわりを持たせて、全てが連なり永遠に離れないとの意味を含み、刺繍の模様などとして多く用いられるようになったのだそうです。

「卍」に関して、経典を紐解くと、「卍」には左回りと右回りと二つの書き方があるのだそうです。仏教的には教義上、左回りが吉と考えられ、左回りが正式とされ、儀式の中でも左回りに行動します。又、違う言い方もあります。卍の左回りは吉祥、右回りは如意と言われ、「他人が傷つけば我が身が痛み、他人が苦しめば我が身が悲しい」という意味を表します。先祖から陝北の地に脈々として受け継がれてきたシンボルが高鳳蓮の剪紙の作品の中に集中して現

を発見しました。虎、口バ、牛、羊、キリンばかりでなく、鶏、兎、人間に至るまで四肢を紙の四角に広げた、図形の展開図のような構図があります。それで、私は高鳳蓮に、何故展開図のような剪紙を剪るのかと訊ねてみました。

「無心に剪っていると空間が出来ることがあるでしょ。四肢は動かすことが出来るので、何処へでも空いた所へ動かすことが出来るからですよ。紙を剪るのは肉を切るのとは違って、自分が望むところへ望むものを剪り出せるのよ。剪紙の図柄は剪紙が大きければ大きい程面白いものが出るし、素晴らしいものにできるの」との答えが返って来ました。見たところ、専門家の理屈とは別に、高鳳蓮は彼女自身が言うように、心の赴くまま無心に制作しているというのが真実のようです。

私は、陝北地区の人々と交流して30年近くになりますが、この地域は未だに貧しく、生徒や子供たちが、普段は野外で勉強していて、思い思いに木の枝などを拾って、地面をノート代わりに字を練習している姿を今でも時々見かけます。経済的にも苦しい日々を過ごしてきた高鳳蓮は、節約が身に付いて浪費を嫌う態度が紙に対しても貫かれています。ですから四角い紙の隅々まで模様を剪り込み、空間を作らないことで、紙を有効に使うという訳です。

動物のお尻の上の「卍」のような毛の流れを陝北の人々は「旋子」(渦巻き:つむじの事)と呼んでいて、どの馬やどの口バのお尻や背中にもあるものです。人々は虎を見たことはありませんが、虎にもきっとあると信じているのです。「うちの子どもたちのほど



黄河畔の生活

こにあるだろう」と、陝北の人たちは子供が生まれるや真っ先に子どもの頭のつむじ、つまり「卍」のありかを調べます。そんな訳で高鳳蓮は四肢を自由に広げて飛ぶ馬の図・「飛ぶ馬」にも「卍」を剪ります。そうすること

とでこそ剪紙の四角(よすみ)の空白部分がなくなり紙の無駄が省けるというものです。

同時に、高鳳蓮は、剪り落した紙屑も決して安易に捨てたりしないで、何気ない模様を剪って生かします。高鳳蓮にとって浪費をしない、材料を無駄にしないことはとても重要なことなのです。慢性的に水不足の陝北地方では食器や鍋を洗った水を家畜の飲み水にするのと同じ考え方ですが、このような黄土高原の村の女性の何気ない行動が、研究者にとっては、長年続けて来た研究の確証を得るヒントになっているのです。

喜んで、心の儘に剪る。黄土高原に住む高鳳蓮にとって、剪紙の図柄は自然に湧き出てきます。剪り出すものは、自分自身の生活です。孫が結婚した時は、高鳳蓮の家に村中のひとたちが次々にやって来てお祝いの宴に連なりとても賑やかでした。接待の準備をする高鳳蓮は十歳以上も若返ったようでした。新娘(花嫁)の部屋の中央に飾られた、結婚を祝う大きな剪紙「喜花」は高鳳蓮が結婚式のずっと前

から心を込めて剪り出しました。

黄河河畔に住む人びとにとって人と水の関係は密接であり、舟を曳いたり、舟のカイを操ったり、泳いだりどれもが剪紙の題材です。高鳳蓮は、何時も昔を思い出します。黄河を渡って、山西省ヘトウモロコシを売りに行った苦しかった歳月、でもそれは同時にその後の生活の貴重な経験となりました。

「昔から、夫婦は林の中の鳥と同じと言われます。男の人は木で、女の人はそれを頼りにします。女は小鳥、木が大きければ、小鳥は安心して休めます。どんな時でも、自分の夫の値打ちを下げたはいけません」。男性は牡丹の花で飾り、女性は蓮の花で飾ります。男性は土、女性は水、二つが合わさって、人が生まれます。頭は天、足は地、陰陽が合わさって、万物は繁殖して行くのです。天・地・太陽が相和して命は継続していくのです。剪紙の題材にはまた、「ひょうたん栽培」と言う図柄があり、画面いっぱいのひょうたんで子孫繁栄を表し、家運の隆盛を祈ります。

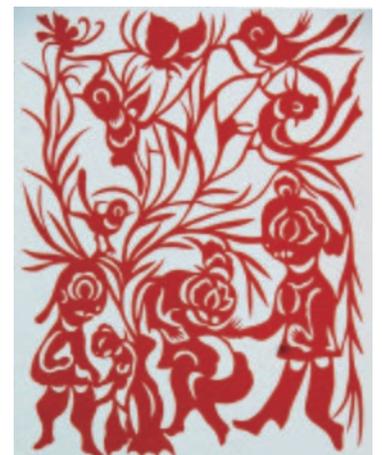
高鳳蓮が、閉鎖的な黄土高原の窑洞の中で、一途に彼女の生活・祈り・望み・経験した事柄を剪紙の作品に仕上げている時、中国の伝統的な文化を研究する学者たちは、遂に、高鳳蓮の作品の中に、中国古来の宇宙観を見たのでした。学歴がなく、文字も知らない陝北の老婆である高鳳蓮の潜在意識の中に、太古から人類に伝えられている情報を見出したのです。これは正に、コロンブスの新大陸発見の現代版ともいえるような発見でした。芸術作品は作者自身の心の吐露であり、同時に地域の文化として豊富に積み重ねられたものが今なお強い生命力を有し民間芸術家の手を借りて色濃く滲み出ていることを私た



糸を紡ぐ



老夫婦



吉兆(カササギが枝に止まる)



羊の放牧



弾き語り



山里の人

ちは知っています。文化として積み重ねられたものは子子孫孫へ、意図的に伝えられなかったとしても、その地の自然・風土が、人々の心の中に以心伝心で伝えるもので、専門の学者たちは、この地に「陰陽結合、万物の生成、万物の継続性など、生々流転と言う中国本来の哲学として伝えられていることは疑問の余地がない」と言います。

このことで、陝北の老婦人・高鳳蓮は、民間芸術の権威者の協力と手助けによって、民間芸術の大家となり、天に通じ地に通じる太古の情報の代弁者となったのでした。この栄光は彼女ばかりでなく、子供や孫たちにも大家となる道筋を用意することになりました。

龍王への崇拝は、毎年の順調な天候の推移と五穀豊穡を祈るものです。他にも竈の神、土地の神への信仰があり、当然のことながら、各家庭の家畜小屋には牛や羊が満ち溢れ、庭には鶏が走り回り、果樹がたわわな実をつけている、春のような穏やかな生

活を祈る気持ちを表 現します。

《二十四孝》シリーズの剪紙もあります。同時に、高鳳蓮はいつも、伝統的題材を掘り起こして、剪紙の形式で、物語の寓意を表現しています。



二十四孝 哭竹生笋 (孟宗)

高鳳蓮の心は正真正銘の陝北女性で、どんな栄誉を与えられても、例え仏の座を与えられたとしても、窑洞での生活、畑仕事、家畜の世話、長年連れ添った夫と子供たちの世話を放棄することはありません。苦勞の多い高原の農地であっても、それは祖先から受け継いだものであり、家族の根源であるのですから、それがなくなれば、全てが断ち切られ、剪紙を通して行う太古との対話も出来なくなると考えているのです。この地で歌われる民謡《信天游》が言うように「故郷の過酷さは分かっている、努力を重ねて守り抜く、忍耐を重ねた先人の苦勞を忘れまい」なのです。

家族そろって和気あいあいと暮らす日々が、高鳳蓮の一生の望みです。

■注

二十四孝(にじゅうしこう)：中国古来の代表的孝子24人をいい、また彼らの逸話を収めた同名の幼童の教訓書をいう。
(日本大百科全書より抜粋)



親子孫 3代の団らん

日中学院・2017年度倉石賞受賞記念および‘わんりい’活動25周年記念
果てしなく広がる黄色い大地・1990年代陝北黄土高原の剪紙展(仮題)

展示会に寄せる思い 田井光枝

開催日：5月14日(月)～18日(金) 会場：東京中国文化センター <https://www.ccctok.com/>

昨年2月、‘わんりい’活動25周年という節目の年明けに、当会が日中友好に貢献とのことで日中学院・倉石賞の対象として表彰頂きました。記念の催しをしようとの話し合いの結果、東京中国文化センターの快諾を頂き、両者主催による表題の剪紙展の開催が予定されました。

この25年間、振り返ってみますと‘わんりい’会員たちの好奇心を原動力に、時には大胆ともいえる活動を重ねてきました。が、東京都心で、しかも中国政府が国外に設立した文化機構である中国文化センターと肩を並べる主催で活動25周年を祝えることは身に余る光栄です。会員各位と常日頃‘わんりい’の活動を応援頂いている皆様のご協力とご声援を心から願っています。

表題の展示会で展示・紹介する作品は、実は、陝西省北部に広がる黄土高原地帯(以下、陝北黄土高原)で生きる人々の‘剪紙’即ち‘切り紙’です。

剪紙といえば、中国に足を踏み入れた方は、「ああ、あれね」と思い浮かべ、同時に「中国の剪紙って結構細かくてきれいなものよね」「でも、どうして活動25周年記念の催しが剪紙展なの? 中国に行けばどこでも売っているし、今さら展示の必要などあるの?」とおっしゃるかもですね。

展示会のタイトルに、わざわざ‘陝北黄土高原の’と断りを入れました。皆さんは「黄土高原」と聞いてどのようなイメージをもたれるでしょうか?

春先の風の強い日、中国大陸から吹き寄せる風で景色が黄色に染まり、路上に駐車した車など細かな黄色いほこりで覆われたりします。洗濯物が埃くさくなり、うっかり外に干したままにしますと洗い直さなければならない事もあります。皆さんがよくご存じの、広大な中国大陸を横断し、日本海を越えて飛



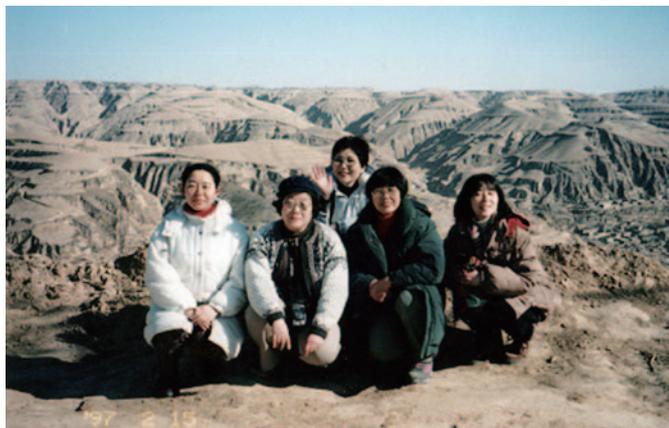
黄土高原

まるで海のように広がる黄土の大地には至る所に深い切れ目が無数にあり「千溝万壑せんこうばんかく」と表現される。そして溝の淵ギリギリまで耕作される (写真撮影：周路)

来する迷惑な‘黄砂’です。その黄砂のもともとの源はモンゴルから中国北部に広がるゴビの砂漠なのですが、その黄砂が300万年に亘って中国の北西部に吹き溜まり、海拔1000mから2000m前後に堆積した黄色い大地が即ち黄土高原です。かつては緑豊かな時代もあったといわれており、中華民族の祖・黄帝を祭った陝西省の黄帝廟の辺りにわずかに残っている緑の山がその名残でしょうか。

四方八方見渡す限り黄土の大地で覆われています。樹木らしい姿はほとんど目に入らず、地平線の彼方まで続く黄土の大地は至る所地割れしたような深い溝が無数に走っています。生活に必要な水はどこからも湧かず、現在では、国連機関から人が居住する世界最悪の環境といわれているとのことです。

小さな木の1本すらも生えてない丸裸の小高い丘に立っても地平線の彼方まで黄色い大地がうねうねとゆるやかに続き、家らしきものも見えませぬ。しかし、よく見ればその黄色い大地は筋状に綺麗に耕されており明らかに人の手が加わっていま



小高い丘の上で記念撮影 どちらを向いても目に映るのは黄色い大地だ



私たちを見に来た人たちが溢れるヤオトンの入り口

す。訊けば南を向いた崖下にヤオトンと呼ばれる横穴住居があるとのこと。

人の姿が見えない黄土の広がりの中の道を私たちが行くと、いつの間にかどこからともなく子供たちの姿が現れ、大人の姿も現れてきました。そして、さるヤオトンの住居に招かれて入ると窓には子供たちの顔が隙間もない程にべったりと貼り付いています。人生の折り返し点を過ぎて初めての‘見られる’体験でした！

安徽財經大学美術学院教授の職を、定年で一昨年に退職された周路先生との関わり（‘わんりい’ 227号/2017年10月号記載）により、‘わんりい’メンバー有志8名が、外国人訪問が認められるようになって間もないこの地を訪ね、そしてこの地で生活している女性たちの剪紙に出会ったのは1997年のことでした。‘わんりい’誌で昨年より紹介している剪紙作家・高鳳蓮を生み出した陝西省延川県はいわば黄土高原のど真ん中ともいえ

るあたりです。

前置きが長くなりました。展覧会の話に戻しましょう。たしかに中国各地、どこに行っても剪紙があり、繊細で手の込んだ作品に驚きます。今年1月中旬、中国文化センターで展示された、人技とは思われない精密で繊細な剪紙にもびっくりしました。中国の各地各様の、人々の願いを反映する剪紙の図柄はどの地方のものも可愛らしく魅力的です。土産物用に剪られた劇中人物の剪紙なども色あでやかで物語の中に吸い込まれそうです。

けれども陝北黄土高原で剪られていた剪紙はそれまで中国各地で出会った剪紙とはまるで異なるものでした。陝北地方の剪紙に初めて出会った時、‘わんりい’ 227号(2017年10月号) で書いたように、いきなり私の心が驚掴みにされたよう衝撃を受けました。

私と同様深く感銘を受けた同行メンバーの岩田温子さんと話し合い、陝北のこれらの剪紙を「ぜひ日本で展示紹介しよう」と話し合いました。その後、二人は別々ながら二度、三度再び現地を訪れ、周路先生に仲立ちを頂いて更に収集し、翌年1998年の5月、町田国際版画美術館の市民展示室を1週間借り切って、大小の剪紙を組み合わせてレイアウトし、「果てしなく広がる黄土高原の剪紙展」と名付けた展覧会で展示しました。当時はまだ、中国の生の文化が紹介されることが少なかったこともあってか、毎日新聞を初め町田周辺のミニコミ誌が紹介くださり、連日多数の方が来場されて鑑賞者は700名を超える盛会で終わりました。その後、



ヤオトンの窓いっぱい貼り付けられた剪紙を内側で見る

他地区の有志の方々が茅ヶ崎市民館や神奈川県芸術の村などで開催下さったことで更に反響が広がり、剪紙と共に陝北というあまり知られていない地方やそこで生きる人々を微力ながら日本で紹介できた喜びを味わうことができました。

今年5月の剪紙展で展示される剪紙は、それらの展覧会で展示された、主として延安・延川周辺で収集された陝北黄土高原の1990年代ものです。すでに20年が経ち、当地の剪紙はかなり変化しているようです。今回の展示の為にそれら当時の剪紙を日々眺めています。すでに古典的な作品の範疇に入るかと思われませんが、それでも尚、作者の息遣いまで感じられような迫力があります。

目の前に広げた陝北の剪紙は、実は中国沿岸部で剪られているような精緻なものではありません。中国の剪紙は「^{そうか}窗花」と称され、基本的には魔除けのように窓に貼りまるでステンドグラスのような効果を家の中で楽しみますから、風がきつい陝北の辺りでは線の細い剪紙は風に耐えられません。が、その線の太さによって却って原始的な力強いエネルギーを漲らせているようです。広げる度に思わず「すごい！」と声に出したくなる自分がおり、眺めても眺めても見飽きることがありません。

外国人に閉ざされた地域、自然の美しさにも縁がなさそうな、「人が住む最悪の環境」といわれる土地柄に打ち負かされず、独特の感性で、天が与えた厳しい環境をはね返えさんばかりに剪られた剪紙の力強さと美しさに心が震えます。

当時、時には近隣のものに頼まれたり、年の瀬の市で売ってわずかな金銭に変えることがあっても、一番の目的は金銭でも栄誉ではなく、自分と家族の健康であり、平穏な生活への強い願いです。当時は病気になっても怪我をしても周辺に医者はおらず、十分な薬もない生活環境です。見るからに実り豊かとは言えないところでの耕作はさぞやきつく大変なことだと想像できます。陝北の剪紙は、そのようなところで生きる家族が健康であり、怪我などせず、平穏無事な一年間を過ごせることへの深

い祈りの心を感じます。しかし、陝北地方の剪紙に心打たれるのはその祈りの気持ちの健気さだけのせいでしょうか。

考えてみてください。環境は、およそ四季折々の変化などと無縁の、生きるための過酷な労働によってやっと生きる糧を得られるような丸裸の土地柄です。当時、剪紙の作者たちは無学のまま文字も書けない女性たちが殆どでした。日々の生活への祈りは勿論恵まれた地域に比べれば一層切実なものに違いありません。しかし、だからといってかくも自由に、かくも美しく、かくも力強く表現する原動力の源はどこにあるのでしょうか。

飛躍しすぎかもですが、現代の繊細で精密な極みの陶器を見慣れた目が生命のエネルギーの塊のような縄文土器や土偶に出会った感動に近いかもしれせん。縄文土器や縄文時代の土偶を精緻な焼き物や七宝の工芸品を並べて比較はできません。価値の基準が違うのです。国や民族を超えた普遍的な人間という存在に根源的に備わる、美しいものを求め、創り出す能力、逆境を逆境のままにせず果敢に乗り越え、更により良いものを目指す能力など、人間である素晴らしさと底力を、当時まだ文明の恩恵を如何ほども受けていなかった陝北の剪紙から感じるのは私だけではないと信じています。

展覧会では、‘わんりい’誌上で紹介されているガオフォンリエン高鳳蓮さんや‘これこそ陝北の剪紙’^{ハンジュウシヤン}といいたくなるほど迫力の剪紙を剪っていた韓菊香さんを中心に、大小合わせて500点余りの陝北女性たちの剪紙作品を展示します。是非、陝北剪紙の素晴らしさをご自分の目で確かめて頂くと共にその迫力をご自分で感じて頂き、私の筆力では伝えきれない陝北の剪紙の素晴らしさを知って頂きたいと願っています。

皆様が会期中のどこかで時間を割いて下さって私と共感頂けたらどんなに嬉しいことでしょう。会期中の催しなどの詳細は4月号の‘わんりい’で紹介できると思っております。

〈2018 ‘わんりい’ 新年会・シュワンヤンローで新年を祝おう〉

2018年2月4日(日) 場所：麻生市民館・料理室

2018年の‘わんりい’の新年会は、立春の2月4日に行われました。春節は16日からなので12日早い開催です。参加者はちょうど50名で、中国の皆さんが16名、マレーシアが1名と国際色豊かな(?)新年会となりました。

例年通り有為楠さんの司会で幕が開き、新代表の寺西さんから開会宣言があり川崎支部長の山田賀世さんの音頭で乾杯となりました。早速、この新年会の定番である「シュワンヤンロー」鍋を囲みながら、そこそこに話の花が咲き始めました。

体が温まりお腹も落ち着いてきたころいよいよ余興タイムです。今回は、高鳥さんの漢詩朗読と歌、佐藤紀子さんと菅野良子さんの二胡演奏、花岡風子さんの漢詩朗読の順で進行しました。花岡さんは、お願いしていた漢詩2編のあと、追加で宋の女流詩人、李清照(1084～1155年)の宋詞・「如夢令」を朗読してくださいました。

そしてここで思いがけず、今年初めてご参加くださった桜美林大学・名誉教授の植田渥雄先生(‘わんりい’「中国語で読む漢詩の会」講師)が思いがけずご登場下さり、李清照と宋詞の簡単な説明を頂きました。宋詞はメロディーが先にあって、それに合わせて作詞されるものだそうで、楽譜は今でも残っているものが少しありますが、調子、歌い方などは分からなくなってし

まっています。それを植田先生が編曲して生き返らせ、朗々と歌ってくださいました。現代に生きる我々が当時の庶民の生活の一部を垣間見た気がします。新年会



「如夢令」を朗読する植田先生

に初めてご参加いただいた植田先生に、素晴らしいプレゼントを頂きました。最後に、小学校唱歌の春の歌2曲と「ふるさと」を皆で歌い余興の部は終わりました。今年の冬は例年になく寒さが厳しいですが、それだけに春の到来が待ち遠しいですね。

今年の新年会でもう一つ報告をすることがあります。それは秩父にある「神怡館^{しんいかん}」の館長である

神林直樹さんのお話です。1982年に、埼玉県は中国・山西省と姉妹友好州省となりました。その記念に秩父の小鹿野町に「神怡館」という名の豪壮な建物を建て、そこで山西省をはじめ中国の各地の文化や歴史を紹介する品々を展示し、多くのイベントが開催されてきました。しかし近年入場者が減少し、また建物の維持費も負担になってきたことなどから今年の3月末で閉館との結論が出たそうです。神林さんからパンフレットが配られ、そうした身につつまされる状況の話がありました。これまで‘わんりい’は神怡館と親しく交流を続けてきただけに残念でなりません。

新年会はこのあと恒例のビンゴで大いに皆さん楽しまれ、最後に会員の河本義宣さんの手締めで無事終わりました。



羊肉のしゃぶしゃぶに舌鼓を打ちながら、会場のあちこちに交流の輪が広がる

張宝華 追悼京劇公演

三国志『鉄籠山』
てつろうざん

- 2018年5月20日(日) (開場 15:30/ 開演 16:00) ※ 全席指定、字幕付き
- 世田谷区・成城ホール (世田谷区成城 6-2-1 小田急線「成城学園前」徒歩4分)
- チケット 一般：5,500円 / 世田谷区民：5,000円 / 学生：2,000円
- ▲ チケット取扱：
 - ◆ ☎ 080-4478-7009 (担当：衛藤)
 - ◆ 新潮劇院ホームページ <http://www.shincyo.com/kouen/180520/main.html>



張宝華 (ジャンバオファ)

1930年9月、北京郊外(現在の通県)生まれ。中国国家一級芸術家。もと鳴華京劇団団長、北京風雷京劇団団長、北京戯曲学校教授。京劇団を経営する父の元に生まれ、5歳の時より名だたる著名な俳優に個人指導を受けて芸を学び、6歳から舞台上がるようになる。1952年、父の劇団は名を「鳴華京劇団」(現「北京風雷京劇団」)と改め、22歳の若さで後継いだ。1954年、北京第一戯曲公演演技賞、1956年北京戯曲大会最高演技賞受賞。2017年10月4日、北京にて逝去。享年87歳。息子である在京劇団「新潮劇院」を主宰する張春祥が父・張宝華の名舞台を追悼公演する。

◆わんりいの講座 **中国語で読む・漢詩の会**

漢詩で磨く中国語の発音！中国語のリズムで読んで漢詩の素晴らしさを味わおう！！

- ▲ まちだ中央公民館 10:00～11:30
- 3月18日(日) 第3・第4学習室
- 4月15日(日) 第3・第4学習室

▲ 講師：植田渥雄先生
(桜美林大学名誉教授、
現桜美林大学孔子学院講師)



- ▲ 会費：1500円(会場使用料・講師謝礼など)
- ▲ 定員：20名(原則として)
- * 録音機をお持ちの方はご持参下さい。
- ◆ 申込み：☎ 090-1425-0472 (寺西)
E-mail: ukiuki65@yahoo.co.jp (有為楠)

◆わんりいの催し **ボイストレーニングをして日本の歌を美しく歌おう！**

あなたも私も笑顔が美しくなる！身体力を抜いて、気持ちよく発声しよう！！

- 3月13日(火) 10:00～11:30
- 4月10日(火) 10:00～11:30
- 共にまちだ中央公民館 視聴覚室
- ★ 動きやすい服装でご参加ください



- 講師：Emme(歌手)
- 会費：1500円(会場使用料・講師謝礼など)
- 定員：15名(原則として)
- ◆ 申込み：☎ 042-735-7187 (鈴木)
E-mail: wanli@jcom.home.ne.jp (わんりい)

初心者のための体験のお誘い
【鶴川水墨画教室】

- 講師：満柏(日中水墨協会・会長)
- 場所：鶴川市民センター 小田急線鶴川駅からバス「鶴川市民センター入口」下車(町田市大蔵町1981 駐車場有)
- 曜日・時間：14:00～16:00 毎月第2、第4(月)
- 体験参加費：1000円(見学無料/手ぶらで参加可)
- 問合せ：野島 ☎ 042-735-6135



‘わんりい’ 231号の主な目次

「寺子屋・四字成語」晴天过海(10).....	2
論語断片(34)徳を以て怨に報ゆ.....	3
天府の国・四川省へ(1).....	4
混迷の時代を拓くザメンホフの人類人主義(21).....	6
東西文明の比較(22)花の都・長安.....	8
「漢詩の会」たより(19)李清照の〈詞〉如夢令を味わう.....	10
樹木・花にまつわる物語②諸葛菜.....	13
海外出張の思い出・日ソ連ノボロシースク編②.....	14
黄土高原に咲く目にも彩なる花々VI.....	16
倉石賞受賞および活動25周年記念展開催に寄せて.....	20
活動報告・‘わんりい’新年会報告.....	23
‘わんりい’掲示板.....	24

【3月定例会開催日及び4月号‘わんりい’発送予定日】 ◆ 問合せ：☎ 044-986-4195 (わんりい)

- 定例会：3月12日(月)/4月10日(火) 13:30～ 三輪センター・第三会議室
- 2018年4月号‘わんりい’発送日：3月30日(金) ※ おたより発送日は弁当持参です